暹羅の日本町（下）

文學博士　新村出

メナム河流域乃至アユーチヤ附近の地圖は、凡そ何年頃の狀況に據つて出來たものかと云ふことを確定し難い。然しながらその所依は十八世紀の初期のものと推定して差支なかるべく、早くとも十七世紀の末期を遡るものではあるまいと考へられるから、要するにケンペルの時代と相去る遠からざる時代の狀態に基いて製作されたものとすべきである。二圖多少の相違の見えること、精粗の區別の存することは勿論であるけれども、日本町の位置に關しては全く變動を認められぬのである。卽ち日本町は二圖ともにアユーチヤの城外をば川を二筋隔てゝ東南に位した河畔に置いてある。ケンペルの二圖にはそこに日本人の所在を記入し、そ

二

暹羅の舊都アユーチヤの城外に於ける外國人居留地の分布はケンペルの日本志上冊の附圖とワレンタインの東方諸國志中の暹羅部の附圖とに依て大概を窺ふことが出來る。ケンペルの渡暹は一六九〇年六七月卽ち元祿三年のことであるから、山田長政が死んで一時日本町が瓦解したといふ寛永十二年卽ち西紀一六三三年からは五十七年目に於ける日本町の位置が其圖の上にあらはれてゐるわけである。ワレンタインの東方諸國志は一七二六年享保十一年の出版であるが編纂に用ゐた材料の年代は一定してゐない。從つて書中に載せてある

れに接して南隣に琶牛人、馬來人を置き、更にその南方の河端に稅關の位置を記るしてをる。他圖にはKの記號の下に、日本人、琶牛人、馬來人の諸部落を擧げた。どちらでも同樣である。ワレンタインの圖には、36の記號下に、河のほとりに日本人の家屋若干軒を描いて日本町の位置を示してあるが、下の方はそれに接して琶牛の部落があり、上の方には支那人の住家などが立つてゐる。對岸には一方に和蘭商館が聳え、他方には葡萄牙人の部落が見える。ケンペルの圖にも蘭人葡人の居留地の布置は載つてゐるが、ワレンタインの方が、稍詳密にあらはされてゐる。

暹羅國風土軍記等本邦の記錄には、日本町の位置を探るべき徵證がないから、山田長政時代の日本町の位置とそれより數十年隔たる時代のケンペル等の地圖に記載せる日本町の位置とが大なる差違があるかどうかと云ふことを確めることは至難である。況んや一七六七年（明和四年）緬甸人によつてアユーチャが破壞された後にあつては、微々たる日本町の遺址を探究して新舊二時代の位置の變動などを知り得るものではない。明治以降數次暹國舊都の跡を訪ひ日本人の古蹟を調査した人々もこの點に於て効果を擧げたことを聞かない。されば予は長政以後速に復興した形跡から推察しても日本町は長政時代の、十七世紀初期にあたる元和寛永年代も、ケンペル時代の、同世紀末期にあたる元祿年代も、乃至ワレンタイン時代の、十八世紀初期にあたる享保年代も、その區域に於て大小の差はあれ、その位置の大體はかはらないのではないかと想ふ。

暹羅國風土軍記（卷一）によると、元和寛永の頃、關ケ原大阪天草の諸役の落人どもが商人となつて渡暹して滯留し、武勇を以て暹國海陸の賊徒を追拂つてやつたので、國王も

是を調法に思ひ地を借して日本人を一廓に置、日本町と號し、海邊に數百軒の町屋あり、永く留るものは妻妾ありて子を設く、故に今此時に至て住居する人數八千餘人ありしとかや、

と記るしてある。海邊とあるのは河邊の誤であるが、戸數や人口には多少誇張があるかも知れぬ。時代は無論寛永時代のことであるが、町の位置は同書の後の卷々に由ると城外であることは確かであるが、方角は全く記るしてない。右の條にも又後の條にも明記してある通り、日本町は借地であつたのである。長政の敗後は一時この借地を召上げられたのであつた。さて同書卷五によると

抑暹羅の王城といふは國都入津の湊より城中に巡り入川あり、城の外郭には町をも構の内へ圍み入、其外は外國より來る船掛りの宿を借す町屋敷十町あり、日本町も此内三郭ありて尤城外なり、城の外郭大にして練塀に揚土門數ヶ所あり、又入津の大河あり、是も外郭の塀通りには橋を仕かけ橋の上は廊下の如く家を作りて多門の如く兩壁に石火矢窓あり、二の郭も亦如斯官人家屋相交り、本丸は王城にて人の出入を改る也、……

とあつて、日本町が城外より最も遠隔な地位に在つた樣であることは、西人の記載や地圖と參照して都城の内外を髣髴として知ることが出來る。尚日本町が三郭あつたといふことによつて、その區域の廣さの程度を推知するに足りる。

三

日本町の住民を前記の如く風土軍記には寛永中に於ける其全盛期に八千餘人と註してゐるが、通航一覽にも之に由つて元和の頃數百人、寛永の頃八千人と考定してある。慶長以來約三十年間のことであるから、多少の誇張はあるにしても、決して過大な數字とは思はれない。ましてや慶長以前日本人の暹地に於ける根抵の相當深いのから推すと

在暹者は蓋し何千人かに上つたであらう。後藤肅堂氏は植民定住者の數は多く見て二千人、極少く積つて五六百人を計算された。

通航一覽卷二六六に引用せる長崎記には、長政渡暹時に於ける在留人數三百餘人と見做し、同く長崎志には六七百人と記るしてある樣に、數字の差違が頗る大であるが、アユーチヤ城内外の日本人だけでも、いかに内輪に見積つても、全盛期には千人以内には下らなかつたと信ずる。何となれば王城の禁衞軍として雇はれた日本兵士の數を西人の書いた諸書に由て見ても五六百人はあつた樣であるから、當時兵士と商人との區別はつかぬにしても、主として商業に從事したものを加へたり又その妻子を計上したりしたらば、恐くは總數は千を下つてはゐなかつたと思ふ。今蘭人等が擧げた日本兵士の數を一々こゝに引證しないが、明清門記に日本より渡れる者を點檢して見たところが纔に五百人あつたとあるが、これは時代も少し下つて寛永以後ではあり、且つそれは專ら兵士をさしたものゝ樣であるから、日本町の住民の總數の概算とは見做されない。

日本人の多數が暹羅から引上げたのを、始く寛永十年卽ち一六三四年であるとすると、その以後同地に留つたものは、激減して數百人に止つたかも知れない。それ以後の商人なり切支丹なりが元祿享保の後世までも殘つて居たことは東西の史籍に散見する所であるが、全盛期は元和寛永間の約二十年間、それに慶長の八九年以後の十餘年間を加へても、凡三十年間に亙るだけで、長政を中心として日本町が繁榮したことは爭へない。

その極盛期の長政時代に於て城中の禁衞軍に屬する日本の將士を除きて主として城外の日本町に居住した商人たちのことは、風土軍記卷四以下に細記してある。卽ち危急時に方つて日本町にゐた

頭分の者と思慮ある者とが集つて評議したことを叙した條に十數人の姓名を錄してある。又そこに日本町の船頭といふ者二名を擧げてある。說明を與へて「船頭といへば世上船こぐ船子の樣に聞ゆれども左にはあらず、蕃國渡海の船頭と云者は、いづれも大商にして名ある者なれば輕々敷ものにあらず、一船の主なり」と云うてある所から見ると、所謂カピタンともいふべき貿易商の親分株のものであつたに違ない。當時此日本町の船頭は鉤屋庄左衞門、玉屋忠兵衞とて福德良智の者どもあつたと出てゐる。

その外に、日本町の全頭領ともいふべき格に「總元締」の岩倉平左衞門といふ名も見える。日本町の宿老株である。これらの連中は、一旦危急に際すると刀劍銃砲を手にして戰つたのであるが、元來長政の麾下に從つて城中に衞戍した將士はこの外に存したと推定すべきである。而して日本町には大小三百餘艘の船舶を備へて居たとは、風土軍記に見える通りで、かくの如くして水陸二軍を後援とし背景として商權を維持したのである。

四

予はこゝに山田仁左衞門長政の原籍、閱歷、渡暹年代を考證し、さては暹地に於ける出世の始末や成敗の迹を細叙するの煩を避ける。唯一言すると、その原籍地は今尙攷究の餘地があるが、彼れが元と沼津城主大久保治右衞門忠佐の六尺（轎夫）より立身したことは異國日記に明徵があつて爭へない。又大久保忠佐は彥左衞門忠敎の兄で、慶長十八年九月七十七歲にして歿したのであるから、長政が元和初年に渡航したといふ說もそれに抵觸しないで濟むが、元和二年（一六一六）アダムスの朱印船で渡暹した英商エドワード・セーリスの記中に見える「日本人のカピタンのオムプラ」

Oumprane Capten of the Japanese とあるのや、翌年十二月平戸發コックスの書簡中に見える日本の「オムプラ」the Japan Ompra とあるのを、直に山田長政のことだとするのは不可能ではないが、稍早計だと思ふ。何となれば、これより先き六七年慶長十五年卽ち一六一〇年に龜井茲矩に暹羅から書を送つた日本人に握浮哪純廣といふ者も見えるから、若し西人のいはゆるオムプラといふ稱號又は職名をこの握浮哪と同じたとすると、元和二三年度にその名稱をもつたものを直に長政に擬定するのは稍早いと考へられるからである。又長政が浮哪の稱號を得たのは、暹羅國書によると、寛永三年西紀一六二六年であるから、元和二年から十年後になるわけである。日本の記錄にも長政を王佛ともオツプラ、オンプラ等とも呼んであるが、この語の意義や由來や異同などに關しては別に考證を試みるつもりであるから、こゝには略する。

いづれにせよ長政が相當に出世して幕府の土井利勝と本多正純とに書をよこしたのは元和七年、卽も一六二一年のことで、二人に向けて贈品もあり、二人からも答書を送つた。その時、暹羅國王より將軍秀忠への國書には、長政のことを坤采野惇と官位名で呼んである。坤は握坤の略で位であるが、采野惇とはケンペルの志にいはゆるTsijatにあたる官名ではなからうかと思ふ。Tsijatは外國輸入貨物の關稅收入役をさすから、前記英商の記事から推しても、日本がさういふ役目を有つてゐた樣であるのみならず、東西洋考卷二に見ゆる暹國三關中の上關は佛蘭機と日本との所轄だともある所から推測しても丁度相叶ふ。東西洋考は萬曆四十五六年頃の著で、それは元和三四年頃の英商の記事と同時に當るから長政全盛期よりは稍以前の事柄を錄したものとせねばならぬ。又天竺德兵衞の渡天物語によつても山田長政が「日本よ

りの御朱印改め被申候」とあるのにも照應するから、長政が一時稅關を主配してゐたと見てよからう。上記の地圖によるも、既述の如く、上關は日本町に近い河岸にあつた樣である。

異國日記によると、元和七年の暹羅國書には次の如く渡暹の日本人を好遇し又拔擢して官職を與へた由が見える。

貴國商艘續至、而優郵之、勝我赤子也、常諭該司、溥濟之、毋滯之、願留者、擢首以總之、名坤采野淳、用導新舊來販等利便、使向後知所興感矣、

之に對する本多土井兩人の答書を崇傳が起案したのを將軍秀忠は一見して、案文中にあつた左の二十二字を削除した。その文句は

我國商士留貴域者擢首統事之告報、實其身之大幸也、

といふので、前文に對する謝辭であつだのである將軍の意では、「誠ニ日本人ノ商人ナド彼國ノ仕置ナド仕候ハ萬一以來不屆義モ出來候ヘバ是非ニ御構無之義」といふ考であつた。酒井土井本多の三老皆之に同意して上記の文句を削除して答書を送つたのである。溫厚なる秀忠はこの年四十三歲の分別盛りであつた。外交上の顧慮周到といはゞいへ、當時の時代精神にあつて論ずれば卑屈に過ぎると難ぜられやう。

かういふ經歷で長政は財政の側から昇進の緒を見出したのであるが詳細はこゝには述べない。

五

長政の沒落、日本町の立退以來、程なく寬永十三年、西紀一六三三年に至つて、いはゆる鎖國令によつて外國渡航が禁止されだが、その後も日暹貿易は支那及び和蘭の商船によつて營まれ、又明曆以後暹羅船が來航したことも度々であつた。これらの便船によつて在暹の日本人の消息はをり〳〵傳へられたのであつた。正保元年暹羅通事を命せ

られた森田長助が同地より歸朝したのは、多數の日本人が同地を引上げた寛永十一年時分の樣である。彼れの子孫や泉屋七三郎の如き者が暹語の通事を勤めて日暹交通に際に通譯に從事した。通航一覽卷一七〇に由ると、延寶年中、異國住居の邦人二十九人中、暹羅にある者木村半左衞門を始め男九人、爪哇に八人、安南に四人、廣南に四人、東京に一人と出てをる。これは實數であるかどうか疑はしいけれど、寛永十年以後四十年後には少數に減じては居たに違ない。彼土で生れた子孫どもを加算すれば、九人よりはもつと多數であつたと推定して差支なからうが、渡航者それ自身の殘存した人數では九人ぐらゐに止まつたかも知れぬ。享保四年刊行の西川如見の長崎夜話草卷二によると慶安の頃長崎人で在暹の富商木谷久左衞門が父母の年忌供養として土産を送つて來た話が書いある久左は壯時渡航したもので、彼地に永住して家老となつたと見えて居る。木谷氏の子孫はその他の日本人の子孫と共に享保頃も尙暹羅で繁昌してゐたとある。享保四年は寛永十年から算へると八十六年になる。慶安は寛永十年からは僅に十五年後に過ぎない。木屋と木谷とは別の家かも知れぬが木屋彌三右衞門といふ船頭は既に慶長十一年（一六〇六）に於て暹羅渡航の朱印を得、爾來度々彼地に渡り、同十八年には駿府で家康に暹國の事情を述べたこともある。

ケンペルの渡暹記の中には、在暹の日本人で平戸の產であつた半右衞門 Hanjemon といふ者が天和二年（一六八一）呂宋に渡航の途中難破し、その後八年ケンペルと同船して爪哇から歸暹した話が載つてゐる。これも亦木谷と共に鎖國以後の暹都の日本町の住人であつたのだ。サトー氏に據ると一六五七年、卽ち明曆三年に於て、在暹の日本人で、尙も同國の王位繼承運動に加擔したことがあ

るといふことである。尙サトー氏は、一六六六年卽ち寛文六年、日本人の切支丹で彼地に奔竄したものがあると誌してをるが、予輩は未だその所依の史料を詳にしない。タシャールの奉使紀行によれば一六八七年卽ち貞享四年暹都に在住マカッサール人（セレベス島土人）反亂のとき、討伐に從つた外人のうちに日本兵が、一人ゐた由を書いてゐる。有名なファルコンに附隨した連中である。

かういふ次第で、長政沒落以後暹羅の日本町は段々衰微したに違ひないけれども約一世紀近い間尙その地位とその名稱とを保ちつゝあつたのである。